

4) Epithelioid sarcoma 2例の診断・治療上の問題点

井上 善也・斎藤 英彦
堀田 哲夫・大塚 寛 (新潟大学整形外科)
江村 徹 (新潟大学附属病院
病理科)
金谷 文則・星野 賢一 (県立十日町病院)

類上皮肉腫は、真皮に発生する比較的まれな腫瘍で、潰瘍を形成し、進行が緩徐であることから、感染症とまちがわれやすく、迅速な外科的治療がなされず、根治手術の機会を失う場合が少なくない。

われわれは、右手関節と左下腿発生の各1例の類上皮肉腫を経験したが、いずれも、生検で診断が確定するまでに、初発から3年を要しており、その間1例は放置、1例は骨髄炎として不適切な治療が長期間続けられていた。それぞれ、右前腕切断、左骨盤半側切断術後の現在生存しているが、ともに経過中に難治性の気胸を併発し、カテーテルによる持続脱気や肺部分縫縮術にもかかわらず、再発を繰り返している。本腫瘍の特徴であるリンパ行性の胸膜下転移が原因でないかと推察される。一般に類上皮肉腫の5生率は約60%であるが、長期予後が必ずしもよくないだけに早期発見、早期治療が重要である。

5) 肝細胞癌に対する CDDP・エピルピシン・リピオドール懸濁液 (CELS) の試作と臨床経験

三浦 雅彦・加藤 仁
中郡 英次・佐藤 博 (新潟大学医学部
附属病院薬剤部)
丹野 慶紀
市田 隆文・早川 晃史
畑耕 治郎・朝倉 均 (同 第三内科)

演者らは、CDDP・リピオドール懸濁液 (CLS) を肝細胞癌に対して応用してきた。今回更に治療効果を高めるため CDDP にエピルピシン (EPI) を併用し、さらに両薬剤の徐放効果を目的とした CDDP・EPI・リピオドール懸濁液 (CELS) を試作し、臨床効果を検討した。in vitro の溶出試験の結果から CDDP では、CLS よりも CELS の方が溶出率が大きかった。この溶出率の差には、レンチン濃度が関与していると思われた。一方、EPI では、CDDP ほど徐放性が認められなかった。末梢血中 CDDP および EPI 濃度の時間的推移の結果から、投与後24時間までの肝からの薬物の流出はそれぞれ46%、65%であった。副作用は静注法に比較して低頻度であった。CT による画像診断所見から、10例中3例に腫瘍部の縮小が認められ、また、AFP および PIVKA-II 値は投与後、増悪傾向が抑えられた。今後、製

剤学的検討を含め、症例数を重ねることにより詳細に評価を進める必要がある。

6) 肝細胞癌における PIVKA-II の臨床的意義

曾我 憲二・鶴谷 孝
相川 啓子・豊島 宗厚
柴崎 浩一 (日本歯科大学内科)
長谷川やすえ・今井千晶 (同 中央検査室)

肝細胞癌に対する診断目的で protein induced by vitamin K absence or antagonist-II (PIVKA-II) の測定を ELISA 法にて行った。肝細胞癌38例中26例 (68%) が陽性を示したが AFP との併用によりその感度 (95%) はさらに上昇した。PIVKA-II は AFP との相関関係は認められないものの、肝細胞癌の進行程度や治療効果の判定には有効な腫瘍マーカーと考えられた。PIVKA-II に影響を与える因子として vitamin K の投与、黄疸の存在は重要な因子であったが、N-methylthioerazol 基を有する抗生物質の常用量の投与では PIVKA-II に与える影響は少ないものと考えられた。

7) 術前腎悪性腫瘍が疑われた乳児奇形腫の1例

大沢 義弘・岩淵 眞 (新潟大学医学部
附属病院小児外科)
内藤 真一・八木 実 (刈羽郡総合病院
小児科)
村井力四郎

奇形腫は小児固形腫瘍のうち神経芽腫に次いで多い腫瘍であるが、組織分類、悪性度、発生部位など多岐にわたる。このうち、未熟奇形腫は全体の約10%を占めるが、良性腫瘍に分類され、浸潤はない。今回、術前画像診断では腎原発悪性腫瘍が疑われ、手術にて腎と連続する巨大な未熟奇形腫と判明した生後4ヶ月の1乳児例を経験した。

本症例は組織学的にも腎と連続して腎原発も疑われるうえ、腎周囲リンパ節にもグリア成分の転移がみられ、稀な症例と思われ報告する。

8) 泌尿器癌患者における末梢血中の LAK 前駆細胞数および誘導される LAK 活性に対する手術の影響

—腎細胞癌を中心として—

照沼 正博・富田 善彦
西山 勉・笹川 亨
谷川 俊貴・木村 元彦
佐藤昭太郎 (新潟大学泌尿器科)

腎細胞癌を中心に泌尿器科悪性腫瘍患者に対して、LAK 前駆細胞である CD16⁺ CD56⁺ 細胞数と末梢血単核球